

結・たより, Vol.13

発行:神戸 : ウイメンズ・シンクタンク・ユイ

1998.10.31. - 12p

請求記号:震災-6-z26

* 震災関連記事のみテキスト化しています

人と環境に負荷の少ない家づくり

1998. 7. 10

前田 由利

地震があつて町がこわれたとき、全ての建造物は、壊れ、燃え、廃棄されるという当然の事実気付かされました。建設行為は、利用可能な自然をもらって、将来的に、利用不可能なゴミを捨てることを意味するのです。

また、家は、大切な家族を包み込みます。特別なことは何もなくても、ただ、無条件に、安らぎであつて欲しいと思います。

現在の“普通の家”は、戦後急速に開発され始めた、安価で便利な新建材に覆われて、環境や健康にはあまり配慮されていません。

地震で倒壊した祖母の住まいの跡に、我が家を建てさせてもらうことになり、人と環境に配慮した普通の家をつくってみようとおもいながら2年半、11年勤めたデベロッパーの仕事が一段落したとき、ついにその思いを実現するため、会社を辞め、1から勉強しながら、設計を始めました。

その考え方をご紹介します。

1. 住まい手の健康を害するもの（製造の作業環境にも有害である）をなるべく使わない

合板は、安価で、初期強度もあり、反りが少ないので、床や壁、屋根の下地、家具類に一般的に使用されていますが、木繊維をまとめるために接着剤が使われています。その中には、今話題の環境ホルモン、ホルムアルデヒドのみならず、フェノールなど人体に有害な物質が多く含まれています。また、無垢の板材に比べ耐用年数は接着剤のそれで決まるため、寿命は短いといえます。

ビニールクロスやビニール床材は、安価で手入れが簡単なため、一般的によく使用される素材ですが、接着剤や可塑剤として有害な化学物質や、抗カビ剤として農薬、安定剤として重金属、発泡剤として青酸ガス、フロンガスなど、ずいぶん人や環境に負荷をかけてしまいます。

健康に良さそうな畳は、防虫処理剤が問題です。

油性ペイント、ラッカー、ニスなどは、有機溶媒として中枢神経を麻痺させる化学物質が、含まれています。

断熱材のグラスウール、ロックウールは、発ガン性が認められます。

こうして、列挙してゆくと、現在、日本の“普通の家”は、ずいぶん人と健康に負荷をかけているこ

とに気付かされます。一方、つい数十年前、戦前の日本では、それらの材料はほとんど使われずに当たり前に家ができていたのです。

便利で安価なものを追求するあまり、多くの化学製品が開発され、人の体は、その急激な変化についてゆけず、どこかで拒否反応をおこしているかのようにみえます。

その一番敏感な人たちが、極微量の化学物質にもアレルギー反応をおこしてしまう“シックハウス症候群”といわれている化学物質過敏症の人たちです。

私や家族は今のところ、化学物質過敏症でもアレルギーでもありません。でも、身につけるものは木綿やウールなどの天然繊維が気持ちいいように、普段の生活は、素肌で触れて気持ちよい、そして元気になれる、素朴なものに包まれていたいと思いました。

2. 燃えると有害であるものをなるべく使わない

ビニールクロスや雨樋などによく使われている塩化ビニール製品は、燃焼時に猛毒ダイオキシンを発生する恐れがあります。

断熱材のポリスチレン、ポリエチレン、樹脂などは燃焼時、一酸化炭素や青酸ガスなどを発生します。

このあふれるばかりの化学物質の安全性について、残念ながら、私には、的確に判断できるほどの知識と情報がありませんでした。ですから今回お手本にしたのは、日本で何百年も経験し、馴染んできた伝統工法なのです。

構造を木造で仕上げ、柱や梁を極力表し、壁や天井は土塗りもしくは板張りとしました。

伝統工法を知れば知るほど、理にかなっていることが多い、と痛感します。

まず、エネルギーのこと。地球上で唯一、地球外エネルギー太陽光を利用できる木を主体としてつくられること。生産エネルギーも低いこと。

柱・梁など構造を隠さないなので傷み具合がよくわかり、手入れ次第で大変長持ちすること。

接着剤で固めず、木組みや金物で接合されているので、解体時、分別収集しやすいこと。

良い香りがすること。

引き戸や欄間など、あらゆるディテールにおいて、合理に徹して美しいデザインが存在すること。

土地の土を塗ること、地方にふさわしいデザインがあること。

等々。

ただ、伝統工法の欠点は、冬、寒いこと。手によるあるいは天然素材によるばらつきがでること。化学製品、工業製品に比べ、手間や時間がかかる、すなわちコストが上がること。

3. ランニングコストを減らそう！

伝統工法の欠点の一つである低い断熱性について、もはや私たち家族の体は“がまん”で対応できません。空調を前提として、エコロジカルに断熱性能を高める工夫をしてみました。

建物全体に、密閉箇所をつくらず、風が通るようにしました。暖房は地下と2階を床暖房とし、1階3階はその輻射と対流で暖めてみることにしました。

壁の断熱は、内の外土壁や下地の杉板の間に100%木から生まれたセルロースウールを採用しました。

屋根は緑化し気化熱を利用します。土壌、珪藻土断熱、セルロースウール断熱、泥と珪藻土漆喰による断熱。屋根緑化は、地域環境の改善に対する試みでもあります。

開口部は木製ペアガラスサッシを採用しました。アルミは生産エネルギーが大きく、（木の100倍）断熱性能も低い（木の6分の1）のです。

また、壁や天井の仕上がりが珪藻土を混ぜた土と木なので、結霜の防止など、調湿効果も期待できます。

4. 建築費について

例えばボードにビニールクロス張り、合板のフローリング、サイディング張り、ルーフィング材といった“普通の家”に比べると建築費は5割増し程度にはなります。

しかし、現在戸建ての平均寿命19年に比して、構造や素材にストレスのない素朴な家は、昔の家のように、2倍、3倍は長持ちするのではないのでしょうか？人生80年とすると、一生ローンはつらいし、何回も建築ゴミを出したくないし、一生懸命につくって、ずっと手を加え、お互いにエイジングを楽しみながら、それくらいは長生きして欲しいと思うのです。

混沌とした現在、価値観をできることからすこしづつ変えなければ、と思います。

これ以上、将来にマイナスの財産を残さないようにしなければならないということ。

便利で安価なことを追求し、使い捨てて、本当に豊かな気持ちになれるのかということ。

森林浴のように、そこにいると心が安らいだり、元気が出たり、そんな家の基本をじっくりみつめてみたいのです。

5. 緑を楽しむ、慈しむ、利用する（図（1））

最後に家の景観などささやかなの試みを図で紹介し結びとします。

建築データ

□所 在 ; 神戸市東灘区御影町

□構造・規模 ; 木造地上3階地下1階

□延 面 積 ; 139㎡ (42坪)

□工 期 ; 1997. 10. 20着工1998. 7. 10竣工

□外部仕上げ ; 屋根芝張り一部銅板葺き、外壁土佐漆喰塗り、

□内部仕上げ ; 天井・壁、珪藻土入り土佐漆喰、一部檜板張り、床檜無垢材フローリング張

[図1あり 省略]

ユイのひとびと

「ユイ」の会員みなさんからののお便りや近況、それぞれの活動ぶりをお知らせします。

●橋本幸子さんからの手紙

5月24日の「結」の会は前日まで出席の予定でしたのに当日朝、急に目まいがして寝込んでしまいました。この日の報告の、「宝塚NPOセンターの始まり」を読んで欠席したことが惜しまれました。

私にはこの種のボランティア活動の継続を困難にする原因の最大のものは、活動の財源だと思っています。初年度、1200万円の予算の3分の2が阪神コミュニティ基金から支給されたようですが、以降のことが案じられます。

既に介護保険法が決定しましたが、この法案で現に特養老人ホームの入居者がかなりの数、追い出されます。その老人の以後のケアを行政はボランティアにゆだねる計画だと聞きました。行政は昨今、内密に大規模の介護施設の建設に知恵を借し、老人福祉を建前に高齢者を餌にしようとしているといわれています。

市民の中から声をあげてNPOセンターがポストの数ほど出来ることが望まれますが、安易ならぬ覚悟があると私は感じました。

私は仮設ネットワークの代表世話人になって、今年は中央政府への陳情や県への申し入れなど、生活援助資金の分配要求等に奔走してきました。現在、孤独死した人が224名（仮設住民）があります。私は孤独死は自殺と変わらない死に方だと思います。死の直前発見され、病院にかつぎこまれて死ぬ人が多いのですが、この人たちはその死に方を全く問われることがありません。

中川さんのスウェーデン、コレクティブハウス探訪を拝読。私は7,765世帯（1998.9.30現在）の仮設に残っている人たちを、小規模のコレクティブハウスに収容し、準公営住宅になるよう、今の仮設住宅を改築できないか、仮設に残って行く先のない人を収容すればよいと思っています。県への要請事項に入れております。

7月末から、3日間「教育と市民を結ぶWeフォーラム」が倉敷であって、帰路、愛生園を見学しました。炎天下の昼下がりでだったので、人影は全くありませんでしたが住民（元ハンセン病患者）は楽しく住んでいるとのこと。園内に立派な病院があり公衆浴場、公共調理場もあって、各戸の造りは仮設住宅を改造した程度のものでしたが、国がかなり援助しているようでした。

〔追伸〕

仮設の実態は最近、急速に変わりました 10月10日にもと居た六甲アイランドの仮設を訪ねましたところ、仮設の強制撤去で移動した人、抽選や個別交渉で断念して出ていった人などで、仮設に残る人は少なくなり、道は歩けないほど雑草が繁っていました。残留組のうち、仮当選で入居待ちの人はいいのですが、応募しても落選つづきの人（60歳台の人）は行く先も決まらず、仕事もなく、病身と重なるともう生きる元気もなさそうでした。孤独死は224名です“4年目の仮設”の真相を近々、「海峡」に報告します。

●住宅改造の設計依頼が今年は多くありました

中川 俱子

住戸の内部をバリアフリーの住まいに改造して、年老いた母親が少しでも快適に住めるようにという希望で、東灘区のマンションの改造を設計しました。和室を洋室ににし、便所の扉を引き戸にし、手すりをつけました。台所はオープンなカウンター方式に変え、明るくなるように変えました。又、百年以上も前に建てられた民家の改造も、この冬には竣工予定です。

そして不思議と母と娘の住む家がほとんどです。高齢者の問題はやはり、女性問題なのだと改めて気

がつきます。今を楽しくそして将来も生き生きと生活できるように住まいを改造していくのはいいやり方だと思います。エネルギーがいりますが、ある時に決心がいりますね。私もそろそろ、自宅を改造したいなあと思っています。

●世界女性情報会議（Know How Conference on the World Women's Information）に参加しました

尼川 洋子

8月19日から28日まで、オランダのアムステルダムに行ってきました。うかつなことでしたが、実はこの“オランダ”という言葉はまったく日本語で、実際には国名は、Holland（ホーランド）、the Netherlands（ネザーランド）で、オランダ語、オランダの、という時はDutch（ダッチ）と言うことを、行く直前に知りました。つまりその程度の語学力で国際会議で発表するという大冒険を企てたのでした。

会場はアムステルダム市内のクラシックな博物館の中のホールと会議室、84ヶ国から女性情報の専門家や図書館員、教育者、メディア関係者、政策担当者たち、300名が集まりました。もちろん、ほとんどが女性です。みんな初めて会ったとは思えないくらい親近感があって、すぐに声をかけあい気さくにあちこちで会話が始まります。と言うのも、「会議」に先立って10ヶ月も前からインターネット上に情報交換の場が（listserv）が開設され、みんなEメールで、さまざまなやりとりをしてきたからです。

私のワークショップのコーディネーターはインドの女性だったので、インドからのメールと主催者からのオランダからメールが日々届き、辞書を片手に読み解くのが大変でしたが、インターネットはつくづく便利なものだと思います。

「会議」の目的は女性に必要な情報をどうやったら世界の女性たちが十分に活用できるようになるか、又、国の政策決定に女性情報をどう取り入れていくか等々、女性と情報をめぐるあらゆる問題が分科会で議論されました。（神戸新聞の10月1, 2日の記事に掲載）

私は日本の女性センターの情報活動と利用者に対する情報教育プログラムについて発表しました。私の分科会の報告者は日本、ソマリア、ドミニカ共和国、オランダ、インド、ベトナムからの参加者、みんな母国語を使えない（会議の言語が英語になっている）ので、苦労しながらの議論でしたが、国をこえての交流はとても新鮮で刺激的でした。

どこの国でも女性たちは元気です。1995年北京世界女性会議の事務局長をつとめたMongella（モンゲラ女史）が基調講演の中で、「Woman tomorrow, man is yesterday」と言った時には会場からどっと笑い声があがりました。女性たちは未来に向かって進んでいるのに、男性たちは過去のまま変わろうとしないという意味だろうと思います。まったく、どこの国でも一緒です。

アムステルダム市内の運河に沿って並んでいる17～18世紀に建てられた間口が狭くて、おそろしく奥行きのある家々のひとつを改造したホテルに一人で8日間泊まりました。近くに有名な「アンネ・フランクの家」（隠れ家）がありましたが、まったく同じような造りで、私も何だか隠れ部屋に住んでるような気分になりました。

オランダの人達の住まい作りは古いものを残しながら、内装はそれぞれに個性的でどの家も大きな窓があるのが特徴でした。

●カナダの旅：男女平等をめざす様々な取り組み

長谷川 京子

9月20日から9日間、カナダ・バンクーバーを訪問し、女性が男性と対等な社会の担い手となっていく

ことを職業教育の面から支援していく様々な取り組みについて、視察してきました。

カナダには先住民がいて、その以外に第2次世界大戦後は世界各地からの移民を受け入れてきたので、多様な人種と文化が共存しています。1971年、カナダ政府は「多文化政策」を打ち出し、1982年には憲法で『人種、出身国もしくは出身民族、皮膚の色、宗教、性別、年齢又は障害』による差別を禁止する等、多民族国家としての社会の整備が進められてきました。その中で女性が社会的弱者であることが認識され、性差別への取り組みが進められてきたそうです。その結果、今では例えば、専門職や管理職の中に占める女性の割合が4割を超えるまでになったそうです。

確かに、責任ある地位に就き堂々と活躍する女性の姿は、訪問先の機関などいたるところで目にしました。女性が自信を持って、外国からの訪問者に自分の事業所の事業について説明し、質問に余裕のある態度で答える姿は清々しいものでした。

又、男性たちも明るくフランクで生き生きと自分の仕事や家庭のことを語ったり、（職業訓練中の男性）、あるいは穏やかに微笑みながら大学の女性研究者へのアフターマティブアクションなどについて、ていねいに説明してくれたり（大学の教授）、女性スタッフの説明に親しみのある反応を返しながら聞き入ったり（政府職員）等、日本男性の固い表情や態度に慣れた私たちにはとてもチャーミングに思えました。

また彼らには“われわれの政府”という強い市民意識があることも感じました。これは一つのエピソードですが、政府職員の人達がカナダ政府の男女平等政策について説明した後、これから政府対訴訟の街頭キャンペーンに参加すると言うのです。その裁判は、過去に政府が女性職員に支払った給料が性差別賃金であったことを理由に正当な賃金との差額を直ちに払えと請求するものだそうです。公務員が政府を相手に裁判を起こし、その支援に、つい今しがた政府の男女平等政策を外国人に説明していた職員が、その足で参加するなんて、日本では想像もできないことです。

カナダの労働法は官民で区別はなく、したがって公務員はその雇い主が政府という以外、他の労働者と何も変わらないのです。しかし、自分たちの政府がこれまで平等政策を努力して押し進めてきたことを誇りに思っても、それ故に過去の不平等を置き去りにすることは許されないと考えれば、その点についての抗議行動をとることは納得できることです。

こんなことがあった夜、私たちはオーケストラを聴きに行きました。失業率が上がってもカナダでは労働時間が延びることはないし、政府は人々が文化を楽しむための援助を続けています。しかも、この演奏会は本来、3,000円位の入場料ですが、開演1時間前に行くと、その半額で入れるので場内は若い人や音楽を楽しみたい人でいっぱいになりました。その演奏会の始めに、指揮者が入場すると人々が立ち上がり、何と国歌斉唱が始まりました。自前のお金を払って聴きにきた音楽会の冒頭、人々が声を挙げて「Oh! Canada」という単純な国歌を歌うのを聞くうち、彼らが国家に対する信頼を寄せ、それに当然参加するという意識を感じ、そのような国家を持つ人々が羨ましいという気持ちになりました。

カナダは人権の保護が手厚い国ですが、それを支えるために、人々が高い自己評価を持つことがとても重視されていました。あらゆる訓練や勉強の基礎には自分に対する信頼が必要というわけです。また、人の感情を切り捨てない国でもあったと感じました。学校・機関・NPOなどいたるところに心理カウンセラーの課程を履修した専門職の人がいて、自己評価を高めたり、性被害や性差別の苦痛を代弁するというような援助が受けられるようになっていました。

日本では、感情を表すことが一人前の社会人としてはマイナス評価になるという傾向があります。人々は感情を切り捨て生きることや働くことが強要されているような感もあります。カナダの人々の素直で豊かな感情表現や、感情の如何が大切にあつかわれている有り様に接し、人権を尊重するというこ

とは、一人一人の人格、感情を尊重することなのだと気づかされました。

神戸空港住民投票35万人の署名、集まる

神戸市がポートアイランド沖に計画している神戸空港の建設について、その是非を問う「神戸市条例制定請求」署名運動が、「神戸空港・住民投票の会」によって取り組まれ、わずか1カ月（8/21－9/21）の間に352,765人分の署名が集められました。あまり住民運動がさかんとはいえなかった神戸で、政令都市で初めてという住民投票条例制定運動が起こり、これだけ多くの市民が行政主導ではなく、住民の意思で「空港」設置を決めるべきと表明したことは、画期的なことです。集まった署名のうち選挙管理委員会では有効とされた307,797人分が10月30日、神戸市に提出されました。

[図表あり 「神戸新聞」記事より 省略]

つれづれ連載(1)

ほんとに行った!?アメリカ<今回の結論-何とかなるものである> 川畑 真理子
「震災関連記事でないため、内容は省略」

■今号は期せずして、ユイのメンバーの海外進出(?)記が集まりました。

“目は世界に向け、地球的に考えながら自分の地域にしっかり足をおいて活動する”というのが、今あらゆる分野でのキーワードになっています。

「ユイ」のシンクタンクに、みなさんの見聞や、活動、提案がたくさん蓄積されて、広がっていきますように。「結・たより」はみなさんの広場です。どうぞ、気軽にお便りください。(尼)

(c) 1998ウイメンズ・シンクタンク・ユイ (デジタル化：神戸大学附属図書館)